

大齋節もあと二週間となりました。大齋節最後の一週間は主イエスの受難を記念する一週間、聖週になりますので、その意味では大齋節の自己修練の取り組みは事実上今週が最後になるといいでありましょう。

私達は修練の期節の中で自分を振り返ること、主なる神の前に喜ばれる存在を目指すものとして過ごしていきますが、今日は福音書にラザロの物語が選ばれております。ここから私達を愛してくださる主イエスの存在をしっかりと学ぶことが教えられております。

ラザロには二人の姉がおりました。マルタとマリヤです。実は主イエスとマルタ・マリヤはこの時が初対面だったのではなく、以前主イエスが二人のところへ来られたことがありました。その時妹のマリヤがじっと話を聞き入ってもてなしをしようとしなかったのにマルタが腹を立て、主イエスに注意するよう求めたのに対し、主イエスは「なくてはならないものは一つだけである」、と逆にマルタをいつくしんで言われたのでした。二人の性格の違いがよく示されております。

さて、主イエスが来られたときは、ラザロが亡くなって四日、ラザロはすでに墓の中でした。「主よ、もしここにいてくださいましたら、わたしの兄弟は死ななかつたでしょうに」。この言葉はマルタの非常に人間的な言葉です。主イエスに何故もっと早く来てくださらなかつたのかと我慢しきれないで言っている言葉なのです。しかしこれは主なる神の前によくないとか、いけないことだと言っているではありません。私達人間はそういう存在だということです。自分の都合を優先してしまう、そのためには主なる神にも不平を言いたくなってしまう、そういう人間の姿なのです。しかし主イエスは、自分中心にしか考えられない人間にこそ信仰は必要であり、信じることが大切であると言われました。マルタはその後すぐに信仰的な言葉を言っております。「しかし、あなたが神にお願いになることは何でも神はかなえてくださると、わたしは今でも承知しています」。マルタは決して完全な人間ではなく、夢中になってしまえば他のことはすっかりどこかへいってしまうように女性でした。しかし、主イエスのことを信じる心をしっかり持っていました。主イエスはそのマリヤに、「あなたの兄弟は復活する」と、慰めと愛に満ちた言葉をかけられたのです。

ここには大きな福音、よい知らせがあります。主なる神の救いの業に与るためには、私達が完全な人間であるのが条件にされるわけではなく、ただ主なる神への信仰をもっているだけで、何の代償も必要なく、与ることが出来るというのです。私達が主なる神を愛するから主なる神が私達に恵みを与えてくださるのではなく、主なる神が先ず無条件に私達を愛し、恵みを与えてくださるのです。その主なる神に対して私達が答えようとするのが信仰なのです。主なる

神の救いの業は主なる神ご自身の決断であるということなのです。

イエスは言われた。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」。マルタは言った。「はい、主よ、あなたが世に来られるはずの神の子、メシアであるとわたしは信じております」。主イエスはマルタとマリヤに人間が決して与えることが出来ない慰めと喜びを与えたのでした。それはマルタとマリヤが立派でそれにふさわしい人間だったからではなく、主イエスの信じるかの一言に信仰をもって応えたからだったのです。

ラザロを通して語られた主イエスの言葉は、実は私達自身に語られた言葉でもあります。「わたしは復活であり、命である。わたしを信じる者は、死んでも生きる。生きていてわたしを信じる者はだれも、決して死ぬことはない。このことを信じるか」。これは、単に今から約二千年前にベタニヤであった話なのではなく、今日でも罪の中に死に、神に対して死んでいる人々にとって主イエスが復活であり命であること、主イエスが今日もなお復活であり命であることを私達に語りかけているのです。この聖書の箇所は私達の教会では葬送式の通夜の祈りで必ず用いられております。それは信仰生活が、主イエスによって示された復活と命に従って歩むことであり、世を去った兄弟姉妹に永遠の命が与えられ、私達もまたよい模範を示された先輩の足跡に従う思いを強くするのです。やがて迎えようとするイースターには、私達が主イエスの存在を一層大きく感じるようになりたいものです。